学生の保育実習不安と自立感

入江　和夫・福地　昭輝*・入江三津子*

Junior College Students' Anxiety for Childcare Training and Sense of Self-Reliance

IRIE Kazuo, FUKUCHI Akiteru*, IRIE Mitsuko*
(Received August 6, 2014)

キーワード：短大生、保育実習、不安感、自立感、事前指導

はじめに

文部科学省（2005）は「幼児教育の充実のための具体的方策」として、「養成段階においても一般教育科目の取得のみならず、インターンシップ（就業体験）等、幼稚園現場での実践を経験することが重要である。」と述べている。教育・保育実習は保育現場を体験する実践的な授業であり、学生はこれを契機にして、幼稚園教諭や保育士を自分の職業とするか否かを考え始めるのではないかと考えられる。教育実習と保育者効力感に関わる研究として、三木（1988）らは教育実習が全般的に保育者効力感（＝「保育現場において、子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」）を高めること、実習園との合致感が高い学生の方が保育者効力感はより高まることを明らかにしている。浜崎（2008）らは、実習前の保育者効力感の高さは実習中の保育スキルの向上に影響を与え、それがまた後の保育者効力感を高めることを明らかにしている。このように教育・保育実習は学生にとってポジティブに作用するが、反面、不安感も大きいのではないかと考えられる。

小学校・中学校教員の養成大学における調査として、大野木・宮川（1996）は「教育実習不安の構造と変化」について大学一年生を対象に調査し、教育実習不安は「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」があり、ほぼ全項目に正の相関があることを明らかにしている。西松（2008）は「教師効力感と不安に関する研究」について新規採用された小中学校教師を対象に調査し、「授業実践」の不安が高い教員は個人的教授効力感が低くなり、「児童・生徒との人間関係」に不安が高い教員は個人的教授・一般的教育効力感の両方が低くなることを明らかにしている。長谷部（2007）は「保育実習に関する学生の意識について－実習不安を中心として－」について保育士を目指す女子学生を対象に調査し、学生の保育実習の期待感を構成する「実習忌避（逆転）」「意義」「出会い」因子の中で、実習不安が高いほど、「実習忌避」感情が強くなることを明らかにしている。これらのことから、過度の実習不安によって、学生が幼稚園教諭や保育士を途中であきらめることがあるとすれば、学生にとって、また養成大学にとっても大きなデメリットになることから、実習不安の低下をもたらす要因を明らかにすることは重要である。文部科学省（2004）はキャリア教育が求められる背景として、若者の精神的・社会的自立感の遅れを指摘している。

そこで、著者らは学生の実習不安が自立感と関係するのではないかと考え、このことを明らかにすることにした。不安感の尺度については前原（2007）らが作成した実習不安尺度を用いることにした。自立感の尺度については大石・松永（2008）が大学生の自立の実態を多面的に把握することを目的として、自立を心理的自立、経済的自立、社会的自立などの側面からとらえる尺度を開発していることから、これを用いることにした。ここでは、幼稚園教諭及び保育士の養成に特化した短期大学の学生に的を絞り、自立感や実習不安感の構造及びこれらの関わりを明らかにすることで、養成大学の事前指導の基礎材料にすることにした。

＊鶴川女子短期大学

１．方法

１－１　調査対象と調査方法

ｔ女子短期大学に在籍する教育・保育実習前の幼稚園教諭及び保育士を目指す２年生49名を対象に2014年5月にアンケート調査を授業中に行った。調査は無記名式の質問調査法とした。

１－２　調査項目

自立感の尺度は大石（2008）らと同じ35項目を５件法（１全くあてはまらない～５かなりあてはまる）で調査した。不安感の尺度は前原（2007）の実習不安尺度と同一の項目の「授業」を「実習」に変えた21項目を５件法（１全くあてはまらない～５かなりあてはまる）で調査した。計算にはSPSS Ver22を用いた。

２．結果と考察

２－１　自立尺度

２－１－１　因子分析

大石らと同じ35項目を使って、５件法（１全くあてはまらない～５かなりあてはまる）で調査を行い、因子分析（主因子法、プロマックス回転）の結果を表１に示した。

表1　自立尺度の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）（5件法：1全くあてはまらない～5かなりあてはまる）

	I	II	III	IV	V	VI	M	SD
I 協調的対人関係（α＝0.824）								
num21. 自分の居場所がある	0.749	0.097	−0.159	−0.029	−0.135	0.151	4.14	0.866
num20. 他人の気持ちを思いやることができる	0.737	0.059	−0.118	−0.169	0.031	−0.085	4.02	0.629
num16. 周りの人とよい関係を維持することができる	0.721	−0.083	0.002	−0.135	0.127	−0.262	3.92	0.759
num7. 自分の長所や欠点がわかっている	0.702	0.039	0.189	0.076	−0.151	−0.165	3.92	0.786
num26. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる	0.624	0.007	0.056	−0.105	0.118	0.141	3.73	0.953
num28. 親には親の、自分には自分の考えがある	0.576	−0.306	0.174	0.170	0.155	−0.090	4.06	0.899
num6. 自分の感情を自分でコントロールできる	0.435	0.367	−0.087	0.029	−0.279	−0.022	3.71	0.89
num27 自分の将来に目標を持っている	0.416	−0.182	0.398	0.079	0.214	0.341	3.8	1.118
II 社会的関心（α＝0.778）								
num17. 日本の政治に関心がある	0.064	0.735	0.295	0.132	−0.206	−0.094	2.57	1
num10. 社会の出来事に関心がある	−0.136	0.694	0.059	0.052	−0.126	0.127	3.24	0.925
num22. 社会的に広い視野をもっている	−0.084	0.680	0.153	0.051	0.069	0.051	2.98	0.878
num18. 新聞を読む	−0.023	0.535	−0.019	−0.038	0.184	−0.057	1.59	0.84
num5. 社会の一員としての自覚をもっている	0.106	0.499	0.046	−0.033	0.056	0.238	3.37	0.782
num9 自分のことを気に入っている	0.110	0.495	−0.372	0.050	0.254	0.114	2.65	1.234
III 生活身辺処理（α＝0.701）								
num29. 日頃の自分の食事は自分で作る	−0.007	0.018	0.692	0.069	0.160	0.006	2.71	1.472
num11. 自分で使うお金の月々の収支を把握している	0.000	0.213	0.640	0.034	−0.086	−0.106	3.06	1.298
num19. 自分の洗濯物は自分で洗濯する	0.048	−0.001	0.607	0.064	−0.009	0.218	2.9	1.636
num 2自分の部屋の掃除は自分でする	−0.079	0.214	0.487	−0.261	0.131	−0.289	4.37	0.972
IV 経済的自活（α＝0.708）								
num15. 大学の学費を自分で払っている	−0.036	0.164	0.053	0.816	0.048	−0.059	1.61	1.187
num13. 自分で生活できるだけの収入を得ている	0.274	−0.088	−0.133	0.608	0.135	0.013	2.16	1.313
num31. 家にお金を入れている	−0.310	0.015	0.097	0.604	0.117	−0.154	1.57	1.099
num1 将来に備えて　蓄え（貯金など）をしている	−0.108	−0.016	0.041	0.522	−0.207	0.366	2.27	1.303
V 主体的自己（α＝0.699）								
num25. 自分で決めたことを行動にうつせる	−0.075	−0.073	0.076	0.071	0.765	0.094	3.65	0.83
num24. 自分の考え、意見をもっている	0.197	0.001	0.022	0.034	0.655	−0.032	3.9	0.77
num12. 自分の言動に責任をもてる	−0.004	0.375	0.134	−0.206	0.437	0.211	3.37	0.809
num32 自分のことは自分で判断する	−0.079	0.238	−0.062	0.367	0.434	−0.181	3.59	0.788
VI 共生的親子関係（α＝0.634）								
num30a. ひとりで過ごす時間を楽しめる(逆)	−0.326	−0.264	0.068	−0.111	−0.008	0.626	1.57	0.842
num8. 規則正しい生活をする	−0.031	0.338	0.125	−0.085	0.021	0.607	3	1.041
num33. 親のことを信頼している	0.132	0.226	−0.081	0.027	−0.004	0.580	4.24	0.902
num3 親は自分のことを信頼している	−0.091	0.138	−0.223	0.054	0.271	0.443	3.86	0.89
因子寄与率（%）	18.51	28.03	35.57	41.57	46.53	50.81		
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI		
II	0.1512	−						
III	0.1697	0.0326	−					
IV	0.2529	0.1341	0.2684	−				
V	0.3806	0.1241	0.1158	0.05734	−			
VI	0.2541	0.1247	0.1016	0.12281	0.2185	−		

除外項目：4相手の気持ちを察して、適切な対応ができる、14自分の意思を親にははっきりといえる、23何でも話せる相手がいる、34自分の健康状態に注意を払っている、35早く親から独立したい

大石（2008）らの自立尺度は７因子構造であったが、ここではその「生活管理」因子はなく、６因子構造であった。「生活管理」構成する各項目は表１の各因子に散らばっていたが、各因子のネーミングは大石ら同一にした。因子Ⅰ「協調的対人関係」（α＝0.824）因子Ⅱ「社会的関心」（α＝0.778）因子Ⅲ「生活身辺処理」（α＝0.701）因子Ⅳ「経済的自活」（α＝0.708）因子Ⅴ「主体的自己」（α＝0.699）因子Ⅵ「共生的親子関係」（α＝0.634）であり、内的整合性も確かめられた。

２－１－２　下位尺度得点

自立尺度の６つの下位尺度項目のM（平均値）及びSD（標準偏差）を算出するとともに、各下位尺度得点を３群に分けた人数分布を表２に示した。

表2　自立尺度得点の平均値と標準偏差

下位尺度得点	最小値	最大値	M	SD	低位群（人）	中位群（人）	高位群（人）
Ⅰ　協調的対人関係	2.13	5	3.91	0.58	7	31	11
Ⅱ 社会的関心	1.17	4.17	2.73	0.66	10	27	12
Ⅲ 生活身辺処理	1.5	5	3.26	0.99	10	29	10
Ⅳ 経済的自活	1	4.75	1.90	0.90	12	31	6
Ⅴ 主体的自己	2.5	5	3.63	0.58	8	33	8
Ⅵ 共生的親子関係	1.75	4.75	3.17	0.64	11	30	8

M:平均値、SD:標準偏差　N＝49名
低位群:M−SD以下、中位群:M±SD、高位群:M＋SD以上

自立尺度得点の平均値を高い順から並べると、「協調的対人関係」(3.91)、「主体的自己」(3.63)、「生活身辺処理」(3.26)、「共生的親子関係」(3.17)、「社会的関心」(2.73)、「経済的自活」(1.90)であった。これらに差があるかを確かめるために１要因の分散分析を行った結果、$F(5,288)=45.149, p<0.001$のように有意な群間差があった。多重比較（DunnettのＣ（５％水準））を行ったところ、「協調的対人関係」と「主体的自己」に差なく、他の項目よりも高かった。次に「生活身辺処理」は「共生的親子関係」と有意差はなく、「社会的関心」「経済的自活」よりも高かった。「経済的自活」は他の項目よりも最も低い値であり、大石（2008）らの結果と同じであった。６つの下位尺度得点を低位群（M-SD以下）、中位群(M±SD以内)、高位群（M+SD以上）の３群に分け、後述する不安感との分析に用いた。

２－２　実習不安尺度

２－２－１　因子分析

前原（2007）ら「教育実習に対する不安と期待、そして実習のストレスと満足感」論文に記載されている実習不安尺度項目に含まれる「授業」の語を「実習」に置き換え、５件法（１全くあてはまらない～５かなりあてはまる）で調査し、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果を表３に示した。

表3　実習不安尺度の因子分析の結果（主因子法、プロマックス回転）（5件法：1全くあてはまらい～5かなりあてはまる）

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	M	SD
Ⅰ 子ども不安（α＝0.836）						
no20教育実習生なので子どもが、なめてかかってこないか心配だ	0.903	−0.174	−0.261	0.172	2.55	1.156
no17子どもにいじめられるのではないかと不安だ	0.697	−0.052	0.019	−0.052	1.88	1.013
no13実習中に失敗して、子どもにばかにされるのではないか不安だ	0.683	−0.030	0.223	−0.128	2.92	1.272
no10実習中に予想外の質問がでたらパニックになるのではないか心配だ	0.544	0.372	0.142	−0.099	3.49	1.139
no18子どもたちが自分の教育・保育実習をきちんと理解してくれるか心配だ	0.543	0.180	0.231	−0.032	3.63	1.349
no19人前で話すことが不安である	0.485	0.221	−0.136	0.073	3.16	1.344
Ⅱ 指導力不安（α＝0.825）						
no5うまく実習することができず取り乱しそうで不安だ	−0.066	0.976	−0.131	0.094	3.88	1.073
no4追い詰められて逃げ出したくなるのではないか心配だ	−0.082	0.709	−0.048	0.070	4.02	0.878
no16うまく実技指導等ができないのではないか心配だ	0.122	0.704	−0.116	0.105	4.53	0.616
no3教え方が未熟で子どもに聞いてもらえないのではないかと心配だ	0.189	0.580	0.230	−0.197	4.2	0.912
no21精神的にまいってしまうのではないか心配だ	0.213	0.463	−0.081	0.340	3.55	1.292
no6子どもの雑談が多くなり収拾がつかなくなりそうで不安だ	−0.196	0.427	0.383	−0.103	3.69	1.004
Ⅲ 身なりの不安（α＝0.787）						
no7服装、髪型はどんな感じがよいのか不安だ	−0.065	−0.056	0.850	0.124	2.49	1.175
no2どのような服装をしていけば良いのか心配だ	0.128	0.029	0.694	0.000	3.06	1.232
no15洋服などの枚数が足りるだろうか心配だ	0.237	−0.328	0.609	0.120	2.37	1.349
no9オシャレ、アクセサリー、化粧などが、どの程度許されるのか気がかりだ	−0.128	0.065	0.593	0.160	1.45	0.843
Ⅳ 健康不安（α＝0.727）						
no12体調が狂いそうで心配だ	−0.127	0.160	0.181	0.741	2.96	1.241
no14遅くまで残ることになり体力が持つかどうか心配だ	0.354	−0.085	0.110	0.506	2.94	1.281
no8実習中、病気をしたりするのではないか心配だ	−0.145	0.068	0.452	0.457	3.24	1.251
累積寄与率（%）	33.27	43.44	50.84	55.59		
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
Ⅱ	0.407	−				
Ⅲ	0.337	0.522	−			
Ⅳ	0.191	0.269	0.227	−		

除外項目：1子どもにわかりやすい実習ができるかどうか不安だ、11着慣れないネクタイ、ブラウスなどで疲れてしまいそうで不安だ、14遅くまで残ることになり体力が持つかどうか心配だ

前原（2007）らの実習不安は「授業実践」「身だしなみ」「体調」「子どもとの関係」「逃げ腰」の５因子構造であるが、今回の分析では後一者がない４因子構造であった。前原らの（ネーミング）を変えて第１因子「子ども不安（←子どもとの関係）」（α＝0.836）、第２因子「指導力不安←（授業実践）」（α＝0.825）、第３因子「身なりの不安（←身だしなみ）」（α＝0.787）、第４因子「健康不安（←体調）」（α＝0.727）とし、内的整合性も満足できる値が得られた。

２－２－２　下位尺度得点

実習不安尺度の下位尺度得点のM（平均値）及びSD（標準偏差）を表４に示した。

表4　実習不安尺度得点の平均値と標準偏差

下位尺度得点	最小値	最大値	M	SD
Ⅰ　子ども不安	2.33	5	3.98	0.72
Ⅱ　指導力不安	1.17	5	2.94	0.90
Ⅲ　身なりの不安	1	5	2.34	0.91
Ⅳ　健康不安	1	5	3.05	1.01

M:平均値、SD:標準偏差
N=49

実習不安尺度得点の平均値を高い順から並べると、「子ども不安」(平均3.98)、「健康不安」(平均3.05)、「指導力不安」(平均2.94)、「身なりの不安」(平均2.34)であった。これらに差があるかを確かめるために１要因の分散分析を行った結果、$F(3,192)=27.598, p<0.001$のように有意な群間差があった。多重比較（DunnettのＣ（５％水準)による）を行ったところ、「子ども不安」は他に比べ、最も高く、次に高い「健康不安」は「指導力不安」と有意差はなく、「身なりの不安」に比べ高かった。「身なりの不安」は全項目に比べ低かった。

２－３　実習不安感と自立感

実習不安の下位尺度得点（＝「子ども不安」、「指導力不安」、「身なりの不安」、「健康不安」）は低～高に３分割した自立の下位尺度得点（＝「協調的対人関係」「社会的関心」「生活身辺処理」「経済的自活」「共生的親子関係」）によって違いがあるのかを確かめるために１要因の分散分析を行った。

２－３－１　１要因分散分析

２－３－１－１　実習不安と自立の「協調的対人関係」

「子ども不安」では$F(2,46)=0.378$, n.s.、「身なりの不安」では$F(2,46)=0.338$, n.s.、「健康不安」では$F(2,46)=0.317$, n.s.、となって、「協調的対人関係」程度による、これらの得点差はなかった。しかし「指導力不安」は$F(2,46)=4.087, p<0.05$となって「協調的対人関係」の程度によって違いがあり、その結果を図１に示した。

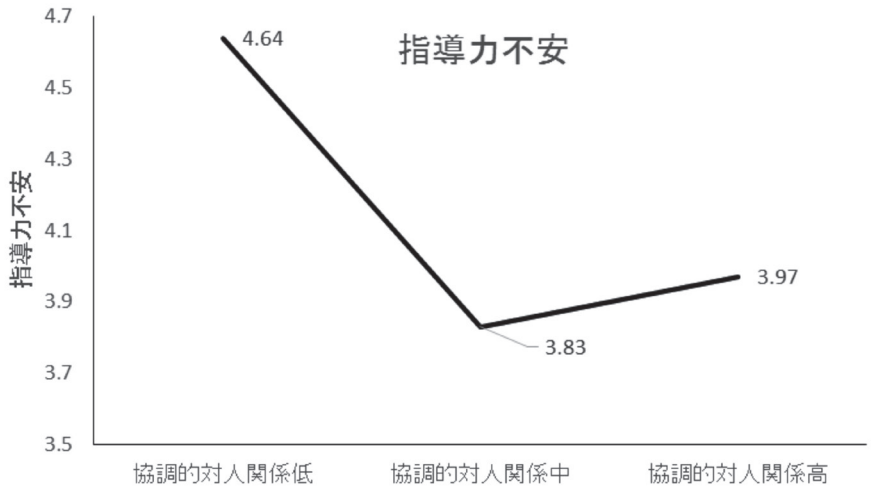

図１　指導力不安と協調的対人関係

多重比較（DunnettのT3（５％水準））を行ったところ、「協調的対人関係」低位群の「指導力不安」は中位群、高位群に比べ高かった。中位群と高位群の「指導力不安」には差がなかった。すなわち、教育・保育実習において“うまく実習することができず取り乱しそうで不安だ”などの「指導力不安」は“周りの人と協力して物事に取り組むことができる”などの項目を含む「協調的対人関係」が良好であれば、低下する傾向にあった。

２－３－１－２　実習不安と自立の「社会的関心」

「子ども不安」ではF(2,46)=1.083,n.s.、「指導力不安」ではF(2,46)=0.645,n.s.、「身なりの不安」ではF(2,46)=0.563,n.s.、「健康不安」ではF(2,46)=0.077,n.s.、となり、「社会的関心」程度による実習不安に違いは見られなかった。

２－３－１－３　実習不安と自立の「生活身辺処理」

「子ども不安」はF(2,46)=1.897,n.s.、「指導力不安」はF(2,46)=0.653,n.s.、「身なりの不安」はF(2,46)=0.352,n.s.、「健康不安」はF(2,46)=0.615,n.s.、となり、「生活身辺処理」程度による実習不安に違いは見られなかった。

２－３－１－４　実習不安と自立の「経済的自活」

「子ども不安」はF(2,46)=2.707,n.s.、「指導力不安」はF(2,46)=1.130,n.s.、「身なりの不安」はF(2,46)=0.609,n.s.、であり、「経済的自活」程度による、実習不安に違いは見られなかった。しかし「健康不安」ではF(2,46)=5.154,p<0.01であり、「健康不安」は「経済的自活」の程度によって違いがあり、結果を図２に示した。

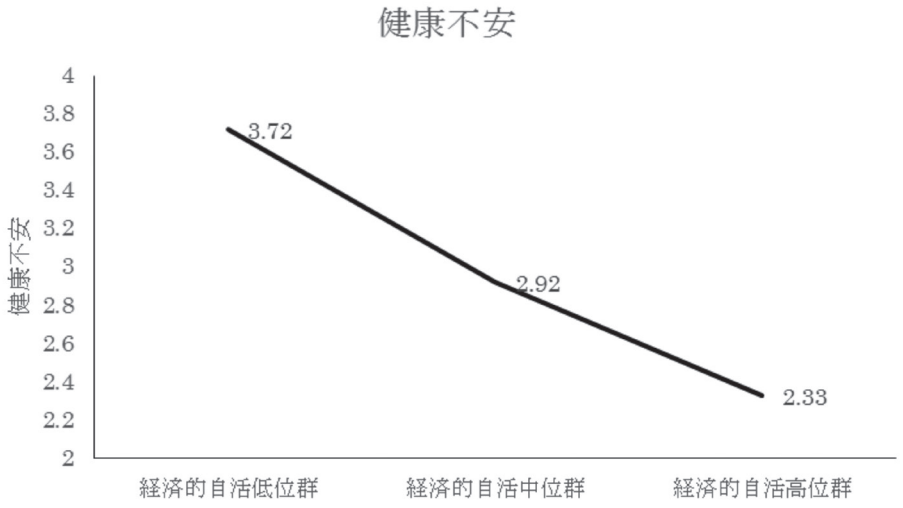

図２　健康不安と経済的自活

多重比較（DunnettのT3（５％水準））を行ったところ、「経済的自活」低位群の「健康不安」は中位群、高位群に比べ最も高く、中位群と高位群による「健康不安」には差がなかった。すなわち、“体調が狂いそうで心配だ”などの「健康不安」は「経済的自活」意識が高ければ、低下する傾向にあった。

２－３－１－６　実習不安と「共生的親子関係」

「子ども不安」はF(2,46)=0.314,n.s.、「指導力不安」はF(2,46)=1.980,n.s.、「身なりの不安」はF(2,46)=0.699,n.s.、「健康不安」はF(2,46)=0.627,n.s.、となり、「共生的親子関係」程度による実習不安に違いは見られなかった。

２－３－２　２要因分散分析

実習不安と自立感の関わりをさらに詳細に明らかにするために、不安感の下位尺度得点を従属変数にし、

平均点で２群に分けた自立感の下位尺度得点を固定因子にして、２要因の分散分析を行ったところ、有意傾向のある交互作用が見つかったので以下に述べていく。

２－３－２－１　指導力不安（経済的自活、共生的親子関係）

固定因子を自立の「経済的自活」「共生的親子関係」とした分散分析の結果、「指導力不安」について交互作用の有意傾向が見られ（$F(1,45)=4.005, p<0.051$）、図３に示した。

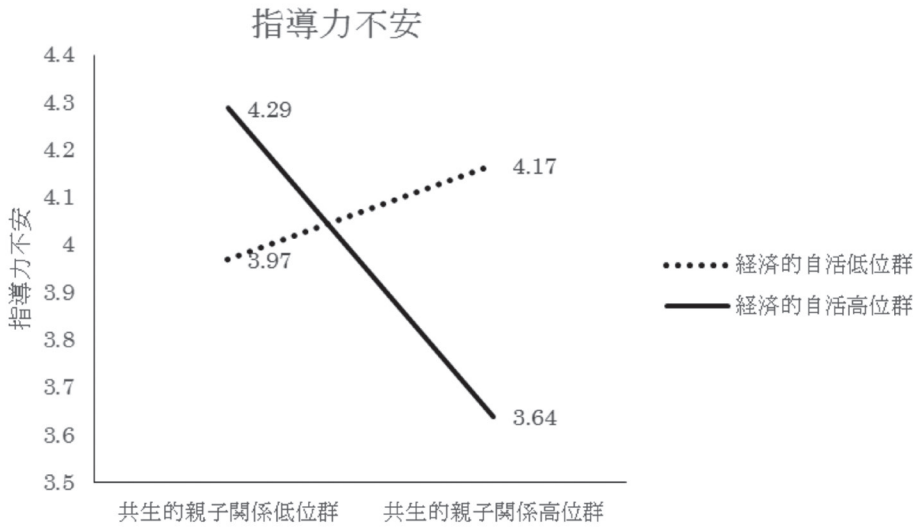

図３　指導力不安

「共生的親子関係」高位群における「経済的自活」の単純主効果は$F(1,45)=3.639, p<0.061$のように有意傾向が認められた。「経済的自活」の高位群における「共生的親子関係」の単純主効果は$F(1,45)=3.832, p<0.057$のように有意傾向が見られた。すなわち“親のことを信頼している”、“親は自分のことを信頼している”などの「共生的親子関係」が良好で、「経済的自立」意識が高ければ、「指導力不安」は低下する傾向にあることがわかった。

２－３－２－２　身なりの不安（社会的関心、生活身辺処理）

固定因子を「社会的関心」「生活身辺処理」とした分散分析の結果、「身なりの不安」について、交互作用効果の有意傾向が見られ($F(1,45)=4.018, p<0.051$）、図４に示した。

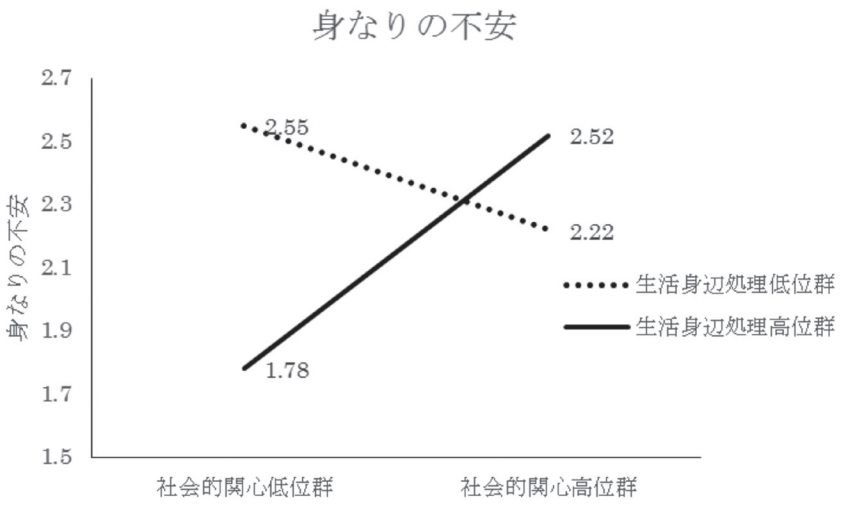

図４　身なりの不安

「社会的関心」の低位群における「生活身辺処理」の単純主効果は$F(1,45)=3.639, p<0.061$のように有意傾向が認められた。「生活身辺処理」の高位群における「社会的関心」の単純主効果は$F(1,45)=3.832, p<0.057$のように有意傾向が見られた。

すなわち、「身なりの不安」は「社会的関心」が低い群で、“日頃の自分の食事は自分でつくる”、“自分の洗濯物は自分でする”などの「生活身辺処理」が十分できない場合には高くなる傾向にあることがわかった。

２－４　相互相関

実習不安及び自立感の下位尺度得点間の相関関係を表５に示した。

表5　相関係数(Pearson)

	子ども不安	指導力不安	身なりの不安	健康不安	協調的対人関係	社会的関心	生活身辺処理	経済的自活	主体的自己	共生的親子関係
指導力不安	.499**	―								
身なりの不安	.382**	.432**	―							
健康不安	.335*	.464**	.493**	―						
協調的対人関係	−0.252	−0.229	−0.108	−0.121	―					
社会的関心	−0.205	−0.192	0.085	−0.057	0.201	―				
生活身辺処理	−0.061	0.109	−0.041	−0.080	0.252	0.179	―			
経済的自活	−.357*	−0.170	−0.150	−.376**	0.211	0.204	0.232	―		
主体的自己	−0.244	−0.044	0.123	−0.011	.394**	.355*	0.233	0.175	―	
共生的親子関係	−0.069	−0.121	0.065	−0.029	0.161	.331*	0.063	0.107	.294*	―

** $p<0.01$, *$p<0.05$ N=49

実習不安の「子ども不安」「指導力不安」「身なりの不安」「健康不安」は相互に正の相関があった。すなわち、学生の「健康不安」や「身なりの不安」を訴えれば、それは「子ども不安」や「指導力不安」にリンクしていることを意味している。不安感と自立感に注目すると「子ども不安」は「経済的自活」と負の相関があり、「健康不安」も「経済的自活」と負の相関があった。すなわち、学生の「経済的自活」意識が高いほど「子ども不安」「健康不安」は低減化することがわかった。

おわりに

１　自立の下位尺度得点の平均値は「協調的対人関係」＝「主体的自己」＞「生活身辺処理」＝「共生的親子関係」＞「社会的関心」＞「経済的自活」であった。

２　実習不安の下位尺度得点が高い順は「子ども不安」＞「指導力不安」＝「健康不安」＞「身なりの不安」であった。

３　“うまく実習することができず取り乱しそうだ”などを含む「指導力不安」は「協調的対人関係」の意識が高ければ、低下することがわかった。また、“体調が狂いそうで心配だ”などを含む「健康不安」は「経済的自活」意識が高いほど、低下することがわかった。

４　２要因の分散分析の結果、「指導力不安」は「経済的自活」意識が高く、「共生的親子関係」が良好であれば、低減化することがわかった。また、「身なりの不安」は「社会的関心」が低く、「生活身辺処理」が低ければ、高まることがわかった。

実習の「指導力不安」に注目して、今回の結果を事前指導の観点から一考する。“うまく実習することができず取り乱しそうで不安だ”、などの項目を含む「指導力不安」は、“周りの人と協力して物事に取り組むことができる”などの「協調的対人関係」があれば、低減化する。言い換えれば、実習生は不安を一人で抱え込むのではなく、お互いに話し合い、悩みを共有し、その解決にむけて協力することが不安の低減化につながるのであり、大学はその機会を提供することが事前指導として重要なのではないかと考えられる。

また、「指導力不安」は家にお金を入れているなどの「経済的自活」とともに親に対する、また親からの信頼感など、良好な「共生的親子関係」によって、低減化する。前者は自分の進路は自分の力で歩んでいるという意識形成につながり、親子関係は現状の自分の理解、悩み相談相手、勇気づけをもらうなど助言環境が身近にあることを意味している。このようなことが実習不安の低減化に役立つことをキャリア教育に含めることも重要であると考えられる。

今後の研究として、調査人数を増やし、さらなる教育実習不安の低減化要因を明らかにするとともに、幼稚園教諭・保育士になろうとする期待感への影響を明らかにしていきたい。

参考文献

文部科学省（2005）：「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」

三木、桜井（1988）：「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」教育心理学研究　第46巻第２号　pp203-211

浜崎ら（2008）：「保育実習が保育者効力感、自己評価に及ぼす影響」鳴門教育大学研究紀要　第23巻 pp121-127

大野木・宮川（1996）：「教育実習不安の構造と変化」教育心理学研究　第44巻第４号　pp454-462

大野木・宮沢（1992）：「教員養成系学生の教育実習不安と教育観に関する調査的研究」，福井大学教育学部紀要Ⅳ（教育科学）,44,1992

西松ら（2005）：「教師効力感と不安に関する研究」、滋賀大学教育学部紀要　No55 pp31-38

長谷部（2007）：「保育実習に関する学生の意識について－実習不安を中心に－」淑徳短期大学研究紀要 第46号　pp81-96

文部科学省（2004）：「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」

前原（2007）ら：「教育実習に対する不安と期待、そして実習のストレスと満足感」琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 第14号　pp211-224

大石・松永（2008）：「大学生の自立の構造と実態－自立尺度の作成」日本家政学会誌Vol.59　No.7 pp461-469